

夏井川流域の地名

「夏井」の由来

地名「夏井」の由来には諸説あります。

夏井川上流の特徴にちなんだ説

夏井川の上流部は、阿武隈高地の中部に位置する冷涼地であることから、ナツ（夏・名詞）・
井（接尾語）で夏の間だけの耕作地を意味する。

（「楽しい」「暑い」「冷たい」「赤い」「青い」などと同じ「夏い」）

夏井川下流の特徴にちなんだ説

夏井川の下流部は、低湿地であることから、ナツ井（泥井）の当て字に由来する。

（なずむ【泥む】：とどこおる／ひたる）

（以上出典：河北新報 2006 年 7 月 23 日「とうほく地名の泉」伊部正之）

また、夏井川流域には、明治 22 年の市町村制施行から昭和 30 年代半ばの市町村大合併にかけて、
2 つの「夏井村」が存在していました。

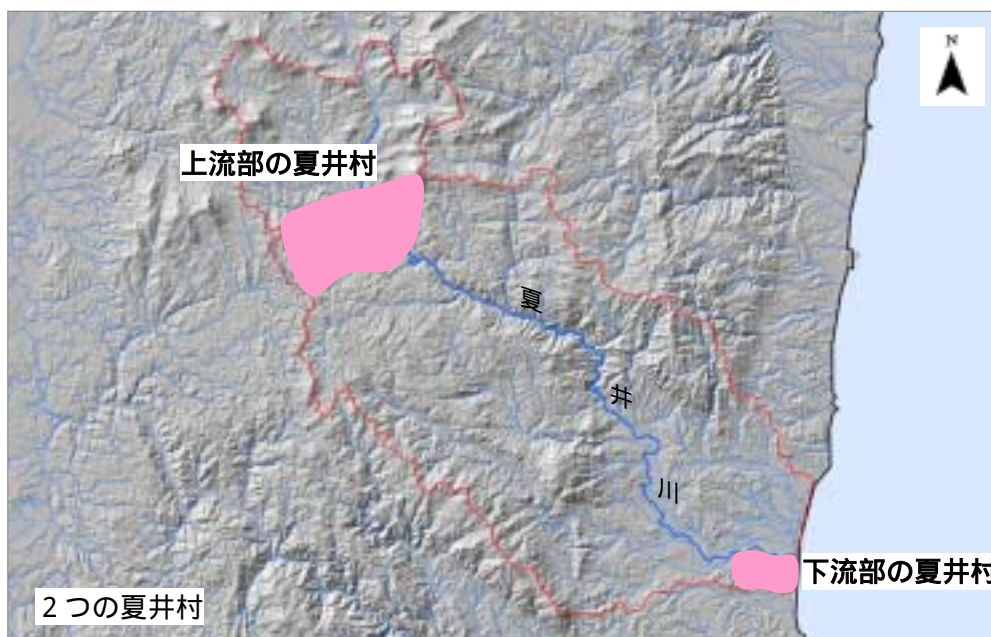
上流部の夏井村（明治 22 年～昭和 30 年）

現在の小野町にある南田原井、夏井（旧北田原井村）、塩庭、上羽出庭、和名田、湯沢の 6 地区
が夏井村でした。この旧夏井村の村名は、夏井川に由来しています。

下流部の夏井村（明治 22 年～昭和 29 年）

現在のいわき市にある平山崎、平菅波、平荒田目、平上大越、平下大越、平藤間の 6 地区が
夏井村でした。

（出典：角川日本地名大辞典 7 福島県 [昭和 56 年 3 月] (株) 角川書店 pp615～616)



夏井川流域の地名

川・水にちなんだ地名

夏井川の流域には、いわき市小川町、川前町、小野町谷津作、田村市滝根町広瀬など川や水にちなんだ地名が多くあります。ここでは川や水との関わりが伺える地名と水の流れる様子を表した百目木、沢目木をあげました。百目木は、水がとうとうと流れる様子から、「とうとう」を漢字に当てはめ「十十」、さらに「百」とし、「とうとうめく」から「どうめき」となったものです。また、沢目木は、「ざわめく」から「さわめき」となったものです。

いわき市

うちごうちまちみずので、平赤井字川子内、平塩字呑内、平下平窪字粥餅川原、好間町川中子、好間町北好間字外川原、四倉町塩木字堤ノ内

小野町

大字夏井字川除、大字夏井字百目木、大字飯豊字沢目木、大字小野山神字百目木

田村市滝根町

大字広瀬字川除、大字広瀬字川原町



夏井川流域とまちづくり

まちづくり

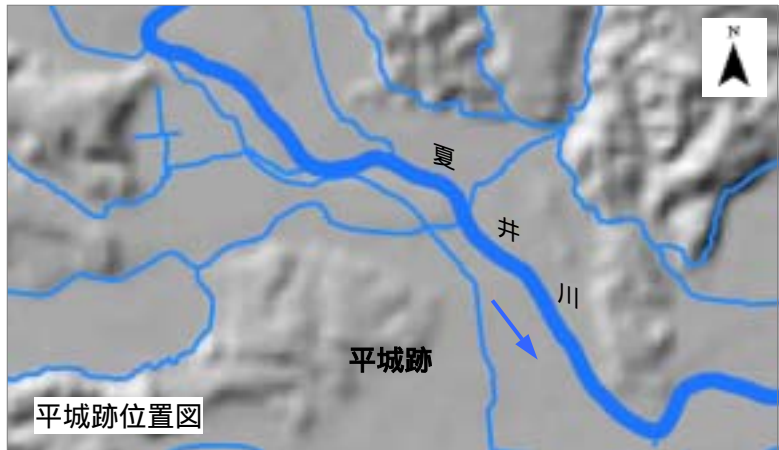
いわき市平に城が置かれていた鎌倉期～江戸中期には、夏井川は生活の基となるだけでなく、境界として政治的、軍事的な防衛線としての役割も果たしていました。

地域社会としてのまちは、河川を中心に形成されていきました。

平城

大阪城をモデルに内堀と外堀をもつ城として、江戸時代初期に築城されました。城の北側から東側へと流れる夏井川を防御線とし、室町・安土桃山時代の天正年間（1573～1592）に架橋された鎌田橋を壊して、渡船場としました。

徳川幕府にとって磐城平藩は、太平洋側の北の砦で、外様大名である伊達藩の南下を警戒して代々譜代大名が置かれていました。

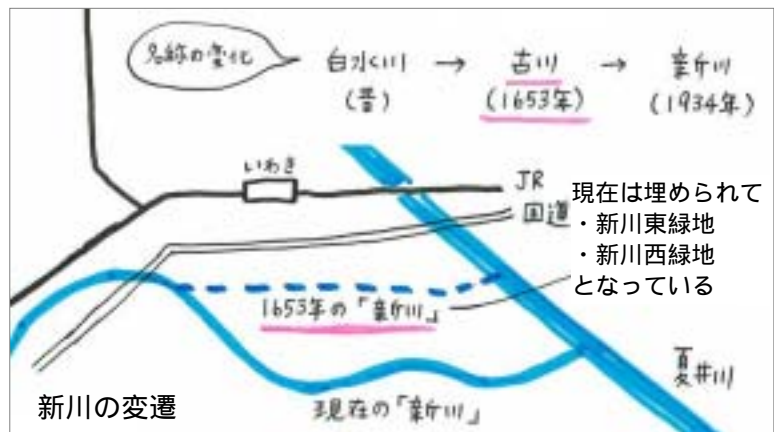


平城跡位置図

（出典：夏井川 [昭和 59 年 1 月] 志賀伝吉 pp107～108、
みらい vol.1 [平成 12 年 10 月] いわき未来づくりセンター p78）

新川改修

戦国時代の町は全て高台にありましたが、江戸時代になると城と町を分離して町を下に降りました。高台の下は、湿地帯で水はけも悪く、川も蛇行していたため、水はけを良くするため白水川の北側に「新川」が掘られました。そして昔からの川は、「古川」と呼ばれました。



後に、新川は埋められ、「古川」が「新川」と呼ばれるようになりました。現在では、昔の「新川」が、新川東緑地、新川西緑地となっています。

（出典：夏井川 [昭和 59 年 1 月] 志賀伝吉 pp19～20、
いわき地域学会佐藤孝徳氏ヒアリング調査）

夏井川流域と洪水への工夫

かすみでい かわよ みずや
霞堤 / 川除け / 水屋 / 炊き出し舟

昔の人は、時として洪水被害をもたらす川と暮らすために、様々な工夫を凝らしていました。

霞堤

夏井川の堤防は、近年の改修により連続堤となつていますが、それまでは霞堤となつていました。



霞堤があつたと推定される部分

(出典：夏井川、夏井川流域紀行、旧版地形図)

川除け

河川が曲がる所は、水の攻撃から守るため石積や沈床^{ちんしょう}*を施し、流れの勢いを弱めるために竹藪を作りました。今でも専称寺下の沈床石積や如来寺下の竹藪が残っています。

*沈床：井桁に組んだ木材に石を詰めたものを、川に沈めて護岸を補強する方法です。

水屋

浸水を避けるために一段高い石垣を巡らし、その上に建てられた倉です。この倉には籾や大切な家財を保管しました。

炊き出し舟

洪水で被災した集落を助けるために、周囲の高台にある集落が炊き出しを積んだ舟を出しました。



霞堤とは、洪水の一部を川の外にためることによって下流の被害をやわらげる方法です。



霞堤の仕組み

(出典：うつくしま「水との共生」プラン
[平成18年8月]福島県)

(出典：夏井川 [昭和59年1月] 志賀伝吉 pp127~130, 179、
夏井川流域紀行 [平成元年3月] pp75~77、現地調査)

夏井川流域と農の工夫

農業の工夫

私たちの主食である米を作るためには、水を欠かすことはできません。

夏井川は平野部では川底が深く、田に水を導くのは困難でした。江戸時代になると小川江筋と愛谷江筋が完成し、大規模な新田開発が可能になりました。それでも、人々は普段から水を大切に使用していました。

流水客土

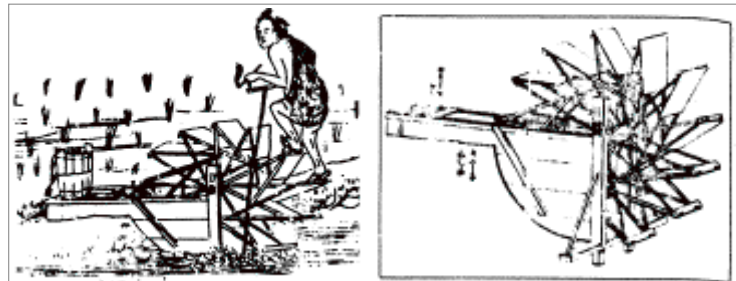
霞堤は、洪水になると耕作地などに浸水をもたらしますが、これとともに上流から肥沃な（養分に富む）土をもたらします。これは、流水客土という昔からの方法です。

水車

小川江筋や愛谷江筋が開削される以前は、田へ水を汲み上げるために、足踏みの水車を使用していました。

江筋が出来てからは、農家では欠かせない仕事であった糞^{わふ}仕事や粉引きなどに使うための水車が、平地の里でも江筋の用排水の落差を利用して作られるようになりました。しかし時代の流れとともに、この水車もいつしか姿を消してしまいました。

（出典：夏井川 [昭和 59 年 1 月] 志賀伝吉 pp114 ~ 124）



水汲み水車（出典：水土里ネット愛谷堰 HP）

水の貴さ

下流の人たちは、上流の人たちが取水した後で川の水を使うため、万が一に備え、水の量が少なくても農業が出来るように、普段から水を大切に使うようにしていました。各地区毎に取水する順番と時刻を決め、等しく水を分け合っていました。現在でも、同じように水を大切に使用しており、湧水への備えにもなっています。

（出典：水土里ネット愛谷堰（愛谷堰土地改良区）ヒアリング調査）

夏井川流域と漁法

漁法

夏井川の川漁は、専門漁師は少なく、農家の人たちが兼業で行うことが多かったようです。ほとんどが自家消費で、趣味的・レクリエーション的な意味合いもありました。

また、江戸時代には夏井川にサケ・マスがたくさん上ってきました。これは、平藩が乱獲を禁じ、藩の収入源として保護したためでもあります。その後、常磐炭田の洗炭で川が汚染され、一時期サケは戻って来なくなりましたが、水がきれいになってきた今では、再びサケが上るようになってきました。

四ツ手網

今でも横川と夏井川の合流点に架かる磐城舞子橋の周辺には、四ツ手網漁の小屋がいくつも並んでいます。

主にシラスやエビなどを狙いますが、ときにボラなども獲れます。



河口部での四ツ手網漁小屋

ひたしどろ 漫胴

一晩仕掛けておいて翌朝揚げてウナギやナマズを獲ったり、秋口に田んぼの水口に仕掛けてドジョウなどを獲りました。



石打ち漁法（石たたき漁法、ハンマー打ち漁法、ガチンコ漁法）

昔、山間部ではハンマーで石を叩いて魚が浮き上がるのを拾い集めました。

笹や木の枝、餌付きのタモ網

主に子ども達が、この方法でエビやカニを獲りました。

籠場の滝の由来

夏井川本川を遡上した魚は、籠場の滝で行く手を遮られるため、滝壺には魚が群れていたそうです。近くに住む人たちは、滝を上ろうと跳び上がる魚を狙い、滝にカゴをかけたことから滝の名前が付けられたとも言われています。また昔は、この滝をシラスウナギ（ウナギの幼魚）が上っていく姿が見られたそうです。

（出典：夏井川 [昭和 59 年 1 月] 志賀伝吉 pp130～132, 146、
夏井川流域紀行 [平成元年 3 月] pp9～11、現地調査、
みらい vol.1 [平成 12 年 10 月] いわき未来づくりセンター p81）

夏井川流域と舟運

舟運

夏井川では中流部が渓谷であるために、舟運はそれほど盛んではありませんでした。それでも下流の平野部では米や木材の運搬に利用されていました。内藤家が大名であった江戸中期までは、下流から川前までの夏井川流域を支配していたことから、夏井川と好間川では舟運が行われていました。その後、小野が笠間藩、川前が棚倉藩、幕府領、笠間藩、平藩と支配が分かれてからは、舟運は廃れていきました。

廻米

江戸時代の大名は、米を江戸へ送り換金していました。夏井川流域の村々でも、廻米として江戸へ米を送っており、陸路とともに夏井川での水路運搬も行われていました。いったん、いわき市小川町関場（小川江筋取水堰下流）に集められた米は船に積み替えられ、夏井川をいわき市平中神谷や平藤間まで運ばれていました。そして最終的に、四倉町、中之作、江名、小名浜の港から江戸へと送られていきました。

（出典：小野町史通史編 [平成4年3月] pp467～469、
夏井川 [昭和59年1月] 志賀伝吉 pp132～137）

木材

木材は、主に「鉄砲流し」という方法で運ばれていました。これは、上流や支流の小さな流れをせき止めて溜めた水に木を浮かべ、堰を壊して鉄砲のような音をたてながら一気に流す方法です。背戸峨廊のトッカケの滝上流に「木流し記念塔」があり、ここでは鉄砲流しが行われていたことがうかがわれます。

木材は、いわき市小川町上小川から河口まで船で運ばれ、さらには江戸までも運ばれました。しかし、滝が連続する狭い河川であるため、木材をスムーズに流すことは困難で、やがて廃れていきました。

（出典：みらい vol.1 [平成12年10月] いわき未来づくりセンターp81、
いわき地域学会佐藤孝徳氏ヒアリング調査）

夏井川流域と信仰

信仰

夏井川も多くの河川と同様に、恵みや災いをもたらす川であり、様々なものを流し去る川として「聖なる川」としての側面をもっています。昔は、僧侶が修行として水垢離をとる場所であり、また、今でも堤防の安全祈願や、「この世」と「あの世」をつなぐものとしてお盆の行事が行われています。

専称寺（いわき市平山崎字梅福山）

応永^{おうえい}2年（1395年）良就^{りょうしゅう}上人によって創建されたと伝えられています。江戸時代には如来寺^{にょらいじ}から名越派^{なごえ}の奥州総本山が移り、常時170人前後の修行僧を養成する東北地方の浄土宗信仰の中心寺院として栄えました。

奥州街道から専称寺までの道は寺道^{てらみち}と呼ばれ、夏井川には専称寺渡舟場が置かれていました。専称寺では、修行として夏井川の水に浸かり、般若心経を誦えたと伝えられています。

（出典：夏井川 [昭和59年1月] 志賀伝吉 p140、
みらい vol.1 [平成12年10月] いわき未来づくりセンター p83）

専称寺の寒修行の様子として専称寺惣代長山崎広義氏（明治38年9月生）の話しが「夏井川流域紀行」に記されています。

真冬の早朝、白雄（良勲）上人（大正12年入寂）を行列の中程にして、ホラ貝を吹く僧を先頭に、20数名の僧侶が、色とりどりの衣を身につけ下駄を履き、何事も唱えながら、寺から夏井川の砂原にやって来る。そこで素足となり、河原を数回巡りながら、お経を唱え続ける。そして、一同川の水で顔を洗うなど身を清めるのだった。……白雄上人と火をたく僧を残して、修行僧は一団となって川の中に膝まで入り、そこでお経を唱え続けた。……川の中から上がった僧の身体はミカンの色ようになっていた。

（出典：夏井川流域紀行 [平成元年3月] pp145～147）

出羽神社の例祭

いわき市平中神谷字大沼と平下神谷字古河あたりでは、堤防が決壊することがありました。平中神谷にある出羽神社の例祭では、御神輿が夏井川まで練り歩きながら、部落安泰、堤防安全、五穀豊穰を祈願するのが慣例となっています。

（出典：夏井川 [昭和59年1月] 志賀伝吉 p138）

川灌頂流し・灯籠流し

夏井川流域一帯では、祖先の霊を迎えお盆を過ごした後、送り盆の行事として、仏様へのお供え物を真孤莫座^{まごもくざ}に包むなどして、「南無阿弥陀仏」と書かれた川灌頂を添え、線香に火を付けて川に流しています。

また、いわき市平鎌田では灯籠流しが行われます。

（出典：夏井川 [昭和59年1月] 志賀伝吉 p143～144、小野町史民俗編 [昭和60年3月] p250、
滝根町史3民俗編 [昭和63年3月] p143）